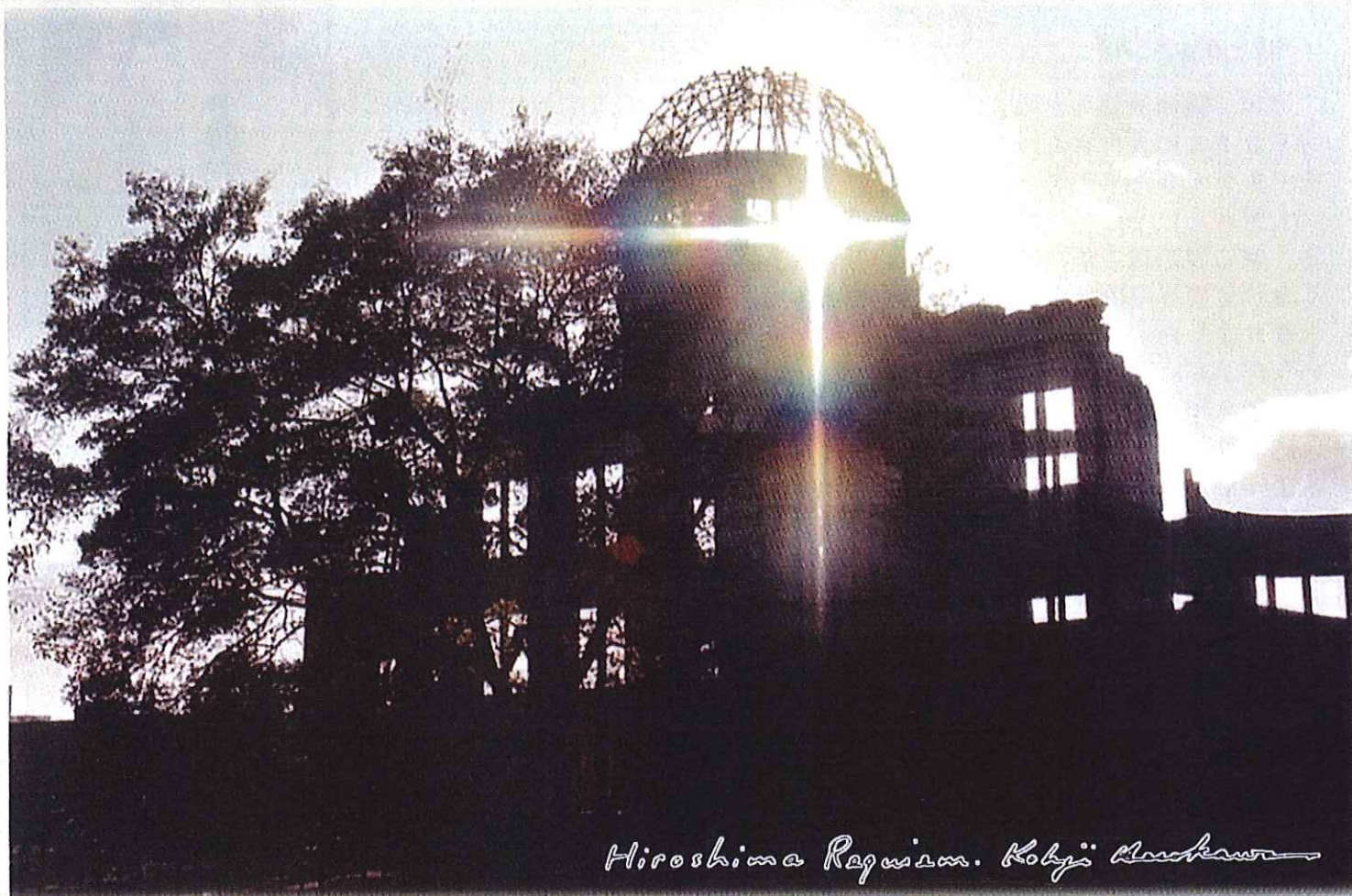


第38回

# 旭川原爆被爆者をしのぶ 市民の集い



*Hiroshima Requiem. Kobji Amakawa*

被爆者の証言—再び被爆者をつくらせないために  
助かっても、終わらぬ核の脅威を語る！

講演 大村 一夫さん

2024年6月29日(土) 14時(開場13時30分)

旭川市民文化会館小ホール 入場無料

主催 旭川原爆被爆者をしのぶ市民の集い実行委員会

後援 旭川市・旭川市教育委員会

【ロビーでは、12時よりパネルと資料の展示を行っております】

# 被爆者の証言—再び被爆者をつくらせないために

## 助かっても、終わらぬ核の脅威を語る！

講演 大村一夫さん

〈道北の死没者紹介〉

〈講演〉大村 一夫さん

「被爆者の証言—再び被爆者をつくらせないために  
助かっても、終わらぬ核の脅威を語る！」

〈詩〉原爆の日 吉岡 満子

〈合唱〉青い空は 会場の皆さんとご一緒に

構成 石井ひろみ

昨年、講演依頼のため札幌の大村さんのご自宅を訪ねました。自己紹介もそこそこに大村さんは、ご自身の被爆体験と、その後の死への不安を抱えて生きてきた半生を、力をこめて話してくれました。

大村さんはその日、姉と一緒に近所の子どもたちと道路で遊んでいました。家の者からご飯に呼ばれ、その子たちから「まだ遊んでいるから、早く食べて戻っておいで」と言われ家に入りました。それが生死の分かれ目となりました。4才8ヶ月の大村さんでしたが、今も「戻っておいで」という声が耳に残っていると言います。

小学2年で札幌へ引っ越し、中学進学の際1954年には、水爆実験に巻き込まれた「第五福竜丸事件」。放射能の影響や後遺症が広く社会に知られるようになり、大村さんも一気に死への不安に襲われていきました。「自分には時間がない」というやけになる気持ちと「生きたい。生きた証しがほしい」という気持ちも芽生えました。早く社会に出たいという一心で、札幌南高校を三年で退学し、大検合格。自動車販売会社に就職します。

大村さんは言います。「日本は78年間平和だったけれども、いつ戦争に巻き込まれるとも限らない。若い世代が戦争を自分の問題として捉え、なぜ戦争が起きたのか、核兵器はどんなものなのか学んでほしい。そのために体験を語ろうと決めました。」と。



◆ 大村 一夫さん ◆  
1940年11月11日千葉市で出生。母は翌年死去。父は開戦と同時に占領地軍政官としてマレーシアへ。帰還後広島へ。8月6日は出張のため留守。中区白島中町にて叔母、姉と被爆。その後仙台、富山、1948年には札幌へ。原因不明の高熱等で小学校を1年半休学。札幌南高校を中途退学し、札幌日産自動車に入社。50年勤続し、専務取締役にて退職。北海道被爆者協会に所属。学校等での講演を行う。趣味は旅行と小型飛行機操縦。

### 《細川浩史さんのこと》

表の原爆ドームの写真は細川さんが撮影したものです。岩波ブックレットから出版されている「森脇瑤子の日記」の瑤子さんのお兄さんです。

この集いを続ける中で大勢の被爆者の方たちとの出会いがありました。道北の被爆者はもとより、広島に住んでおられた細川さんとは、取り分け親しくさせて頂いておりました。語り部としても活躍しておられ、旭川で講演していただいた時、その日記を抜粋して読ませていただいた私たちに「久しぶりに瑤子ちゃんの声聞いたようでうれしかった」と言って下さいました。

その細川浩史さんが、昨年亡くなりました。コロナにも罹り、入退院を繰り返して、何度も死線を彷徨い、その度に主治医から「被爆者の超人的な生命力」と言われ、蘇っておられました。コロナも収まり、やっと穏やかな日々を過ごされておりましたが11月26日95歳、老衰ということでした。その年の9月、広島でお会いできたのが最後の思い出でした。ありがとうございました、細川浩史さん。



「旭川原爆被爆者をしのぶ市民の集い」は、道北の地で人生を終えられた原爆被爆者の方々をしのび追悼する会です。被爆者の思いと願いに耳を傾け、胸に刻む時となることを願っております。

代表委員 打本厚史(僧侶) 北村一幸(牧師) 上野道子(キリスト者) 水津久子(キリスト者)

実行委員/安藤路恵・石井ひろみ・打本紀美恵・江尻ひろみ・嶋田雅之・下間啓子・富塚美方子  
広井真弓・万年孝子・山原緑・山田さなえ・渡辺拓真

お手伝いいただける方、ご連絡ください。TEL.0166-87-2080 FAX.0166-87-2658(打本)

被爆者の声をネットでお聞かせください。

被爆者の声

検索

<http://www.geocities.jp/s20hibaku/>

※このお知らせは、発行巻数のご厚意により掲載しています。